学 校 だ よ り

蓮 沼 中 学 校

令和８年度　第７号
令和８年11月９日発行
大田区立蓮沼中学校
校　長　張替　健二

響き合うということ

10月31日（土）、蓮中祭（舞台発表の部）が開催されました。そこには、生徒たちの限りない可能性と、人間が他者とともに何かを創り上げることの素晴らしさが凝縮されていました。

午前の合唱コンクールでは、体育館いっぱいに生徒たちの歌声が響き渡りました。力強く伸びやかな歌声、繊細で優しい歌声、心の奥に染み入るような歌声。それぞれのクラスが、それぞれの解釈と表現で一つの作品を創り上げていました。指揮者の一挙手一投足に応えようとする姿、互いの声を聴きながら呼吸を合わせる姿、歌い終えた後の充実した表情。その一つ一つに、これまで積み重ねてきた努力と仲間への思いが表れていました。どのクラスにもそれぞれにしか生み出せない魅力がありました。順位や賞という尺度だけでは到底測ることのできない価値ある歌声の数々でした。

午後の舞台も実に多彩で魅力的なものでした。趣向を凝らした発表やパフォーマンス、見る人を楽しませようとする創意工夫。出演者の表現力はもちろん、それを支える人々の働きにも目を見張るものがありました。そして、何より特筆すべきは、蓮中祭全体の企画、準備、進行、運営に至るまで、生徒たち自身が主体となって成し遂げたことです。表舞台で輝く人がいれば、舞台裏で黙々と役割を果たす人もいます。目立つ仕事もあれば、誰にも気付かれないような地道な仕事もあります。その一つ一つがつながり、互いの働きを支え合ったからこそ、あれほど充実した一日が実現しました。これは単なる行事の成功ではありません。自ら考え、判断し、責任を果たし、他者と協働して一つのものを創り上げる力を、生徒たち自身が発揮した証しです。

ところで人はなぜ合唱に感動するのか。理科では音の三要素として「大きさ（振幅）」「高さ（振動数）」「音色（波形）」を学びます。音を物理現象として捉えれば、こうした要素によって音の特徴を説明できます。一方、音楽を形づくる要素としては「リズム」「メロディー（旋律）」「ハーモニー（和声）」等が挙げられます。これらが有機的に結び付くことで、音楽という芸術が成立します。しかしながら音の物理的な性質や音楽の構成要素を理解するだけで、人の心を揺さぶるような感動がもたらされるでしょうか。そもそも合唱をつくり上げる一人一人は、異なる個性をもった別々の人間ですから、声の高さも大きさも音色も違えば、感じ方や表現の仕方もちがいます。適当に声を出しても合うわけがありません。練習を始めた当初は、音程やリズムがそろわなかったり、他のパートにつられてしまったりすることもあるでしょう。自分のパートを歌うだけで精いっぱいだったかもしれません。それでも互いの声を聴き、音程やリズムを確かめ、何度も練習を重ねるうちに、少しずつハーモニーを形づくるようになります。他のパートにつられず、自分の役割を果たしながら、全体の響きに溶け込んでいく。それは決して自然に実現するものではありません。自分と向き合い、仲間と向き合い、試行錯誤を繰り返した結果として生まれるものです。ここに合唱の本質的な素晴らしさがあります。本来異なる人間同士が互いの違いを認めながら、努力によって調和を生み出していく。最初はできなかったことが、困難を乗り越え仲間と力を合わせることで、できるようになる。その瞬間に得られる喜びは何物にも代え難いものです。私たちが合唱に感動するのは、完成した音楽の美しさだけでなく、そこに至るまでの努力や葛藤、仲間とのつながり、そして成し遂げた喜びまでも感じ取るからではないでしょうか。

このことは、合唱に限った話ではありません。学級も学校もそして社会も、考え方や個性の異なる人々によって成り立っています。大切なのは、全員が同じ考え方や同じ個性になることではありません。違いを排除するのでも無理に一つに合わせるのでもなく、互いの違いを尊重し、それぞれの持ち味を生かしながら、よりよいものを創り上げていくことです。学校教育が目指すものもこれに通じています。一人一人が自分らしさを大切にしながら、他者の存在を認め、互いに学び合い、協働して新たな価値を生み出していく。自分の考えをもちながら他者の考えにも耳を傾け、自らの役割と責任を果たし、時には困難や意見の違いを乗り越えていく。そうした経験を積み重ねることが、これからの社会を主体的に、そして豊かに生きていく力につながります。生徒たちの歌声と輝く姿は、人と人とが響き合うことの素晴らしさを教えてくれました。

文責　主幹教諭　佐藤　豊